

地域振興の原動力としての企業家の活動

——岡山県の事例——^{†,‡}

太 田 耕史郎

(受付 2021年5月13日)

1. はじめに

本稿は筆者の最近の論文と同じ目的意識の下に岡山県の起業家一族の企業家としての、またそれ以上に慈善家としての活動を詳しく見ていく。岡山県の起業家一族を取り上げるのは倉敷紡績、倉敷絹織など多数の企業を設立・経営しながら倉紡中央病院、大原美術館の開設を始め様々な慈善活動（社会事業）を展開した大原孫三郎、それらを承継し、発展させながら倉敷の街づくりや水島臨海工業地帯の形成に尽力した總一郎、父親が設立した福武書店の通信教育事業を軌道に乗せ、企業買収により同社の事業領域を拡大する一方で、瀬戸内海の島々を舞台に瀬戸内国際芸術祭（瀬戸芸）を開始した福武總一郎の存在を主な理由とする。彼らの他には水飴を製造する林原商店を戦後、生産量日本一にまで成長させ、林原美術館に所蔵される刀剣を蒐集した林原一郎とインターフェロンやトレハロースの製造法の開発により同社を世界的なバイオ企業に転換した健、両備グループの多角化を推進し、企業の公共関係の一環として夢二郷土美術館などを設立した松田基、アパレル企業のストライプインターナショナルの創業者で、岡山芸術交流を主導する石川康晴、オリエン特美術館に美術品を寄贈した大紀産業創業者の安原真二郎と岡山瓦斯元社長の岡崎林平（正確には林平が残した美術品を長男の重樹が寄贈した）などがいる¹⁾。

本稿は次節で岡山県と岡山・倉敷両市のとりわけ産業に関する概要を述べ、第3節～第8節で上記の企業家の活動を紹介する。第9節では彼らの縦（世代間）と横（同時代の企業者間）の繋がりを視点として全体をまとめる。そうした繋がりは企業家一族の地域貢献を

† 本稿を作成するに当たり、筆者は（公財）有隣会に便宜をお借り頂いた。記して感謝申し上げる。

‡ 表記上の注意点を2点、記して置く：①存命中の人物であっても敬称を省略する、②他の文献から引用する場合、原則的に漢数字は洋数字に、旧字体は新字体に、和暦は西暦に変更する。

1) 岡山県には天満屋の創業した伊原木一族もいる。伊原木一族は第5節で取り上げる松田一族と同様に財界活動に熱心で、岡山商工会議所会頭を伍朗（第33-38代：1948.3-1960.7）と一衛（第46-51代：1980.4-1998.3）が、岡山経済同友会代表幹事を伍朗（初代・第2代：1947.8-1953.3）が務めている。隆太は現在、岡山県知事（第18-20代：2012.11-）である。しかし、伊原木一族の企業・財界活動を越えた慈善活動は資料では十分に確認できない。

より豊かなものとし、またその調査は彼らによる地域貢献のより正確な評価を可能としよう。

2. 岡山県の概要

岡山県は東は兵庫県、西は広島県、北は鳥取県と隣接する。南には瀬戸内海が広がるが、1988年に開通した鉄道道路併用橋の瀬戸大橋（鉄道では本四備讃線）により香川県と直結される。兵庫県、広島県とは山陽本線・新幹線、鳥取県とは伯備線で結ばれる。岡山県は備前、備中、美作の3つの地域に大別され、岡山市、倉敷市、津山市がそれぞれの中心都市となる。岡山市は県庁所在地かつ政令指定都市（指定：2009年4月1日）で、県内の主要企業や大学が集積、人口は2021年4月1日時点で719,134（推計）を数える。また、（岡山）後楽園・岡山城周辺とJR岡山駅周辺は観光地点となっている。岡山城（天守閣）は宇喜多秀家により1597年に築城され、黒漆で塗られた外壁から「烏城」とも呼ばれる。後楽園は岡山藩第2代藩主、池田綱政により築庭され、日本三名園の1つとされる。岡山県はかつて教育県とされたが、岡山市には所謂ナンバースクールの旧制第六高等学校（設立：1900年；現岡山大学）が存在した。同校は多方面に人材を輩出したが、そうした中に元中国銀行頭取の守分^{もりわけひさし}十や大原總一郎が含まれる。倉敷市は工業都市であり、その発展は県南部の児島半島の干拓と大いに関連する。児島半島はかつて島であったが干拓により江戸時代初期に北西部が高梁川左岸と陸続きとなり、またそれにより児島湾が形成された²⁾。干拓地では塩分に強い綿花が栽培され、明治時代にこの地域に倉敷紡績所などの紡績所が設立された。1965年にマルオ被服（現ビッグジョン）が東京の貿易会社からの委託製造を開始したのを嚆矢として児島地区でジーンズの生産——紡績、染色・織布・整理加工とジーンズ縫製——が盛んとなった（倉敷紡績も1970年にデニム事業を開始した；日本繊維新聞社 2006）。現在、児島地区には39の店舗が連なる児島ジーンズストリートもある。倉敷・水島地区では1943年、高梁川改修工事で誕生した旧東高梁川河口部廃川地とその地先の埋立地に県により三菱重工業航空機製造所（現三菱自動車工業水島製作所）が誘致された。戦後の1947年には県により水島港が改修され³⁾、浚渫土砂で埋立地が造成され、クラレ（誘致協定調印：1956年）、三菱石油（1958年）、日本鉱業（1959年）、東京製鉄（1960年）、川崎製鉄（1961年）を始め多数の企業が誘致され、水島臨海工業地帯が形成された。2018年時点での立地事業所は216所、雇用数は24,008人、

-
- 2) 児島湾では明治時代の1899年に藤田財閥の藤田伝三郎により干拓が開始され、一部、農林省（現農林水産省）に引き継がれて1963年に完成、約5,500haに及ぶ干拓地は農地として利用されている。
 - 3) 水島港は1947年に運輸省指定港湾に指定されたため、「国庫より2分の1の補助」（水之江・竹下 1971, p. 106）がなされた。

製造品出荷額は4兆421億円（岡山県全体の48.4%）で、事業所別雇用数はJFE スチール西日本製鉄所（倉敷地区）が3,940人、三菱自動車工業水島製作所が3,634人、三菱ケミカル岡山事業所が1,177人、ENEOS 水島製油所 A・B 工場が1,154人、旭化成製造統括本部水島製造所が1,093人、クラレ倉敷事業所が840人などとなっている（岡山県産業労働部『水島臨海工業地帯の現状』（2021年3月））。倉敷市は文化観光都市でもあり、大原美術館のある美観地区には2019年に県内で最多となる328.3万人の観光客が訪問した（後楽園・岡山城周辺のそれは240.4万人；岡山県産業労働部観光課『観光客・その流れと傾向——令和元年岡山県観光客動態調査報告書——』）。倉敷市の2020年の人口は475,232人（推定）である。

『平成28（2016）年経済センサス』のデータより岡山県と、岡山市、倉敷両市の中核産業を確認して置こう。各産業（大分類）の従業員比率と特化係（location quotient: LQ）が共に10%以上と1.5以上となる産業を便宜的にその県または市の中核産業とすると、岡山県には中核産業はない。製造業（中分類）に関して従業員比率とLQが7.5%以上と1.5以上となる産業を県または市の中核産業とすると、岡山県では繊維工業（9.5%、2.30）がそれに該当する。岡山市と倉敷市にも中核産業はなく、製造業（中分類）に関して岡山市では印刷・同関連業（11.3%、2.81）、倉敷市では鉄鋼業（14.4%、5.26）、繊維工業（14.8%、3.57）、化学工業（13.1%、2.69）がそれに該当する。また、岡山県では製造業（21.4%、1.37）、また製造業（中分類）に関して岡山市では繊維工業（9.1%、2.19）、食料品製造業（17.7%、1.22）、倉敷市では輸送用機械器具製造業（17.0%、1.36）がそれに近いものとなっている。

3. 大原一族

3.1. 企業家として

大原家は「今から5百年前、児島半島から今の倉敷に移って来て、地主兼商業資本家として代を重ねてきた家である」（大原總 1981a, p. 63）。孝四郎（1833–1910）は「岡山の儒者藤田家から養子に来〔て〕」（*id.*）、1888年に倉敷紡績所（1893年に倉敷紡績に改称）を設立、社長に就任した。1891年には倉敷銀行を設立、頭取に就任した。

孫三郎（1880–1943）は孝四郎の三男であるが、長男基太郎は19歳で、次男は「出生後間もなく」他界したため（大原孫三郎伝刊行会 1983（以下、『大原孫三郎伝』）、p. 14）、嫡子となった。備前市にあった、郷校の閑谷学校に連なる閑谷巒、次いで東京専門学校（現早稲田大学）に籍を置いたが「非常な学校嫌い」（大原總 1981a, p. 65）で、東京では「道楽のし放題をし」（*id.*, p. 66）、学校は中退した。しかし、倉敷に戻って出会った岡山孤児院院長の石井十次に感化されて改心し、1906年に倉敷紡績と倉敷銀行の社長を引き継いだ。倉敷紡績は世界恐慌を日本興業銀行からの600万円の長期融資で乗り切るなどして1943年下期には

精紡機100万錘以上を備える、所謂「十大紡」の1つとなった^{4,5)}。所謂戦後恐慌、震災恐慌と生産過剰で紡績業界が苦境に陥ると、1926年に「当時の先端技術であった人造絹糸〔(レーヨン rayon)〕」(クラレ website, “企業概要”)を製造する倉敷絹織(倉敷レイヨンを経て、現在はクラレ)を設立して経営の多角化を図った(ただし、同社は「操業以来数多くの障害に遭遇し」(『大原孫三郎伝』, p. 254), 「経営の見通しが明るくな〔った〕」のは「1932年の夏ごろから」(id., p. 273)であった)。倉敷銀行は数回の合併により第一合同銀行、1930年の山陽銀行との合併——これは上記の日本興業銀行の融資の条件とされた——により中国銀行となり、孫三郎が頭取に就任した。1909年に倉敷電燈を設立(倉敷紡績も1915年に倉敷発電所を設置した)、同社は合併により1916年に備作電気となり、孫三郎が一時、社長を務めた。備作電気はさらに数度の合併を経て1951年に中国電力となった。1913年には中国民報(設立:1892年)の経営権を取得、県下の産業振興の勸奨、都会と農村とに起ってきた社会問題の究明と社会教育の指導を使命とした(id., p. 103)。同社は1936年に山陽新報と合併して合同新聞となり、1948年に創刊70年を記念して山陽新聞社に改称した。倉敷紡績は1933年に本社を大阪市に移転し、倉敷には倉紡記念館があるのみである。他方で、クラレは現在、東京都区部に本社を置くが、倉敷には生産拠点の倉敷事業所と研究開発拠点のくらしき研究センター(旧中央研究所)が残される。倉敷中央雇用開発協会『倉敷企業ガイド2021』によると倉敷事業所の従業員数は2019年10月16日時点で992人であり、同社は製造業での主要な就業先となっている。なお、大原家は600余町歩(100町歩 \div 1km²)の農地を所有する大地主で、「小作者も2,500人以上もいた」(id., p. 79)が、本稿は孫三郎の農業経営には踏み込まない。

總一郎(1909-68)は孫三郎の一人息子で、地元の旧制第六高等学校、東京帝国大学(現東京大学)経済学部を卒業後、倉敷絹織に入社して1939年に社長に、1941年には倉敷紡績の社長にも就任した。大戦後の1946年に倉敷紡績、翌年に大原家の資産管理会社である大原(資)が持株会社に指定され、両社は所有する株式を持株会社整理委員会に譲渡、大原(資)は解散した。總一郎は1947年に上記2社の社長を辞任したが、1948年に倉敷絹織(翌年から倉敷レイヨン)の社長に復帰した。また、その間に物価庁次長を務めた。總一郎の倉敷レイヨン社長としての功績にドイツのWilly O. HerrmannとWolfram Haehnelが発明した合成樹脂のポリビニルアルコール(ポバール)とそれを原料とする合成繊維のビニロンの事業化(工業化)があり、これら、そしてやはりポバールを原料とするポバールフィルムは現在の主要事業と

4) 十大紡とは東洋紡績、呉羽紡績、大日本紡績、鐘淵紡績、敷島紡績、大和紡績、倉敷紡績、富士瓦斯紡績、日清紡績、日東紡績の10社である。

5) 大戦中に倉敷紡績と後で触れる倉敷絹織は軍需会社法(制定:1943年)の下で軍需会社に指定され、前者は倉敷工業、後者は倉敷航空化工となった。なお、軍需会社は「国家要請ニ応工全力ヲ發揮シ責任ヲ以テ軍需事業ノ遂行ニ当ルベシ」(3条)とされた。

なっている（他方で2001年に祖業のレーヨン事業から撤退した⁶⁾。また、それと同様に、あるいはそれ以上に重要なことは総一郎が「真に頼むべきは・・・自らのうちにある力のみ」として独自技術の開発によりそれらの事業化を成し遂げたことが「クラレの社風」（中村尚夫第5代社長；『日経産業新聞』1994.11.17., p. 32）・「クラレのDNA」（和久井康明第7代社長；『日経産業新聞』2009.7.30., p. 18）となったことであり、クラレはその後も多数の技術開発と製品の事業化を実現し、学会などより技術賞を受賞している（クラレ website, “主な受賞歴”を参照のこと）。さらに言えば、総一郎は自社の利益のためだけでなく、1950年代初頭の「危険な国際収支を改善するために、原料のすべてが国内にあるビニロン工業〔の〕確立」（大原總 1981, p. 74）に取り組んだのである。同社の創業時に、孫三郎も他社とは異なり、「〔自社の〕研究所で養成した化学者と、倉紡の機械技術者だけの手によって製造を行うという根本方針を立て」、そのことが「倉敷絹織独特の製造技術を確立する基となった」（『大原孫三郎伝』, p. 274）。1958年には当時は国交がなかった中国の要請を受けてビニロン・プラントの輸出を決断、1966年にこれ（プラントの引渡し）を実現した。

総一郎の長男、謙一郎（1940-）は1963年に東京大学経済学部を卒業して米イェール大学（Yale Univ.）大学院に留学したが、1968年に総一郎の体調悪化を受けて帰国し、倉敷レイヨンに入社、1982年にクラレ副社長に就任した。1990年に中国銀行に転出、同年に副頭取に就任し、1998年に退任、1999年に退行した。謙一郎は大原一族から倉敷紡績またはクラレの役員になった最後の者となる。

3.2. 慈善家として

孝四郎の倉敷紡績所の設立は倉敷（村）が「米と綿花の集散のほかに取り立てた産業を持たないまま明治時代を迎え」、〔それ〕を憂えていた20代の青年3人が策定した紡績事業計画に賛同したことによる（倉敷紡績 website, “クラボウヒストリー”）。また、長女、卯野の夫である原邦三郎が「有為な青年に学資を援助し〔ていた〕」（『大原孫三郎伝』, p. 31）が、彼の没後の1898年に孫三郎の提案を受け入れ、それを大原家の事業として引き継ぐべく「基金10万円を提供して」（*id.*）大原奨学会を発足させた。「大正末期に至る二十数年間に、無慮数百名」が「学資貸与の恩恵に浴し〔た〕」（*id.*, p. 32）。古稀にはやはり孫三郎の勧めにより「倉敷町の貧窮家庭の子弟に就学を奨励し援助」（*id.*, p. 45）するための財倉敷奨学会の設立に1万円、また「閑谷〔学校〕保校会に1,500円〔を〕寄付」（*id.*, p. 52）した。

孫三郎の極めて多岐に亘る慈善活動は「心の師と仰〔ぐ〕」（倉敷紡績 website, “大原孫三

6) ポパールフィルムには難溶性ポパールフィルム（光学用途、離型用途、繊維包装用途など）と水溶性ポパールフィルム（水溶性パッケージ用途、水圧転写用途など）の2種類ある（クラレ website, “製品情報”）。

郎人物伝”)石井への支援から開始された。石井の岡山孤児院は大阪にも出張所などを設置、石井の没後の1917年に孫三郎が勲石井記念愛染園を設立した。同園は孫三郎からの10万円の寄付により1937年に石井記念愛染病院（現愛染橋病院）を開院（『大原孫三郎伝』）、1952年には社会福祉法人に改組され、現在は医療事業、隣保事業と介護事業を展開する（石井記念愛染園 website）。倉敷紡績では大部屋式の女子寄宿舎の「炊事場や食堂〔が〕甚だ非衛生」（『大原孫三郎伝』、p. 69）であったため、その原因となった請負制度——請負は炊事から女工募集や日用品の販売に及んだ——を請負人の脅しに怯むことなく全廃した。寄宿舎も「少人数の者が居心地よく睦〔ま〕じく、家族的に寝起きすることのできる〔よ〕うに」（*id.*, p. 76）と「平家の「分散式〔 〕」（*id.*, p. 73）のものを建設、診療所も設置した。2万円の改築資金は「役員賞与を減らし、配当も5分減」として捻出した（赤井2007, p. 156）⁷⁾。後に、寄宿舎を社宅に代えている。

教育に関しては、工場内に尋常小学校や倉紡工手学校を設置し、1902年に設立した私立倉敷商業補修学校（現倉敷商業高校）では校長を務め、教鞭も執った。また、同年に信濃毎日新聞の主筆、山路愛山の紙上での訴えに応じ、「これこそ天下の風教を培養する最良の手段」（『大原孫三郎伝』、p. 51）として倉敷日曜講演を開設、大隈重信を始めとして「日本人名事典に掲載されているような人ばかり」（犬飼1973, p. 19）を講師に招聘した。講演会は1925年までに76回、開催され、現在も有隣会により「大原孫三郎・總一郎記念講演会」として継続される⁸⁾。また、上記の大原奨学会の運営に、貸資生への「送金通知には必ず激励や訓戒の言葉を加え」たり、貸資生が各地で組織した親睦会に「きるだけ〔 〕出席」するなど（『大原孫三郎伝』、p. 47）、「熱心に尽力した」（*id.*, p. 32）⁹⁾。東京の郷土学生のための寄宿舎の設置にも「多額の寄付を行〔った〕」（*id.*）。1923年には倉紡中央病院を、一部の株主の批判もあったが、「治療本位〔の病院〕」「病院くさくない明るい病院」「東洋一の理想的な病院」と

7) 孫三郎はドイツの Friedrich Krupp AG に福利厚生を求めた。總一郎も1959年に「〔同社〕社長〔, Alfred Krupp〕親子を岡山工場および倉敷に案内」（クラレ編1980, p. 37）している。やはり paternalism の実践者とされる鐘淵紡績の武藤山治も Krupp の福利厚生に関する小冊子入手し、これを参考に鐘紡共済組合を設置するなどした（武藤1934）。なお、Krupp の小冊子は第1編「住宅及日用品購買に関する設備」、第2編「衛生に関する設備」、第3編「各種基金救済財団及教育機関」から構成された。

8) 有隣会は1943年に発足した敬堂会を改組して、また大原謙一郎が設立発起人となって1968年に設立され、2010年に「孫三郎・總一郎の事績を顕彰し、その志を広く世に伝えることを目的に一般財団法人として再スタートし〔た〕」（website, “沿革”）。2008年には孫三郎が設立した上記の医療機関、美術館、3研究所と有隣会により「相互の連携と協力により、大原孫三郎の社会的事業活動の精神を受け継いだ社会貢献活動を行っていくこと」を目的に「大原孫三郎関連施設・機関ネットワーク」が結成された（法政大学大原社会問題研究所 website, “大原社研関連サイト”）。

9) ただし、「二十歳前後には、・・・石井十字の感化もあって、キリスト教による救世の理想を持つ〔ち〕」（大原総1981a, p. 97）、それゆえ育英奨学事業に関しては「かかる方法で貸資することは余の天職にあらず。余は特定の人を教育すべきではなく、・・・。唯一言葉に信仰に依り人類に根本の命を与えんとする事が余の天意と思う」（『大原孫三郎伝』、p. 48）と述べている。

いう3つの設計理念」(倉敷中央病院 website, “病院の沿革”)の下に「創業準備費, 建設費に約200万円」(『大原孫三郎伝』, pp. 160-1)を投じて設立した(この金額は yaruzou.net の日本円貨幣価値計算機(CPI)の計算によると2019年の32.5億円に相当する)。また, 「開設当初より倉敷紡績従業員はもとより, 広く地域住民の診療も行[った]」(id.)。同病院は1927年に独立採算制の倉敷中央病院, 1934年に(財)倉敷中央病院, 2013年に(公財)大原記念倉敷中央医療機構(以下, 倉敷中央医療機構)倉敷中央病院に改組・改称された。なお, 岡山市内には1870年設立の岡山藩医学館大病院を起源とする岡山大学病院もあり, 1921年の設立で, 医療器材事業などを手掛けるオルバヘルスケアホールディングスは自社の発展をこれらの病院を核とした「地域医療の発展」と関連付ける(同社各種資料)¹⁰⁾。さらに, 1914年に「農業の科学的研究と農事改良を行う」(『大原孫三郎伝』, p. 90) (財)大原奨農会(後の(財)大原奨農会農業研究所), 1919年に石井記念愛染園の救済事業研究室を「母体」(id., p. 126)とした大原社会問題研究所, そして1921年に倉敷労働科学研究所を, 最後のものは倉敷の万寿工場の中に設立した。大原奨農会には設立時に農地約百町歩, 1922年にも百余町歩を寄付し, 大原社会問題研究所に「創立から・・・1939年までの21年間に・・・支出した金は, 総額で約185万円[になった]」(二村 1988, p. 66)¹¹⁾。現在はそれぞれ岡山大学資源生物科学研究所, 法政大学大原社会問題研究所, (公財)大原記念労働科学研究所となっている。岡山県の名産に桃, 梨とブドウがあるが, 大原奨農会は「[これら]の品種改良, 温室ブドウの栽培研究を行っ[ている]」(倉敷紡績 website, “大原孫三郎人物伝”)。1930年には大原奨学会貸資生(奨学生)の1人で, 前年に死去した児島虎次郎(1881-1929)が欧州で「収集した[Claude Monet (1840-1926)の「睡蓮」, Henri Matisse (1869-1954)の「画家の娘—マティス嬢の肖像」やEl Greco (1541-1614)の「受胎告知」を含む]作品, そして虎次郎が画家として描いた作品を公開するために」(大原美術館 website, “美術館の歴史”)大原美術館を設立した。「孫三郎は民藝運動の良き理解者[・]支援者」(倉敷民藝館 website, “倉敷民藝館”)でもあり, 1936年に東京で設立された「日本民芸館の建設費[,]10万円を提供」(『大原孫三郎伝』, p. 325)した。財界活動では倉敷商工会議所の設立に尽力, 1929年に初代会頭に就任した。

総一郎は企業のみでなく, 孫三郎の上記の様々な事業も引き継いだ。大原美術館では「短かった生涯として驚くほど積極的に幅広い蒐集を行い, 戦後の大原美術館の内容を多彩なも

10) 近年では, 「中国経済産業局および(公財)中国地域創造研究センターが共同で主宰する中国地域医療機器関連産業参入フォーラム「医の芽ネット」[と]倉敷中央病院[が]連携し, 同病院の臨床現場のニーズ・・・を発信し, 地域のものづくり企業等との具体的なマッチングを図るためのニーズ発信会を開催し[ている]」(医の芽ネット・パンフレット(令和元年度医の芽ネット事業「倉敷中央病院ニーズ発信会」))。

11) ただし, 大原社会問題研究所の「研究所小史」(website)は「1937年大原氏からの財政援助が打ち切られたため, 研究所は・・・東京に移転し, 規模を縮小して存続をはかった」と述べている。

のとし」(藤田 undated), また1961年に近代日本洋画を展示する分館, 1961-63年に陶器館など現在の工芸・東洋館となる幾つかの建物を設立した(理事長就任は1964年)¹²⁾。1948年に設立された倉敷民藝館¹³⁾は「江戸時代後期の米倉」(website, “倉敷民藝館”), 喫茶店のエルグレコは「大原家 [] の小作農地の管理, 経営のため」(website) に1925年に設立された奨農土地管理会社の事務所を改装したもので, エルグレコは總一郎が名付け親である。また, 孫三郎は倉敷の街づくりに道路敷地や道路・トンネルの建設費用を寄付する形で, あるいは1919年に「町内の有力者を糾合して」(『大原孫三郎伝』, p. 165) 設立した倉敷住宅都市(株)を通じて関与したが(中野 2001), 總一郎は「歴史的景観を生かした〔街〕づくりを提唱」¹⁴⁾, 中高の同窓である浦辺鎮太郎と「昭和30年代後半から構想〔の〕具現化」に取り組んだ(倉敷商工会議所 2019)。1968年に倉敷市伝統美観保存条例が制定され, 大原家所縁の大原美術館, 倉敷アイビースクエア, 旧大原家住宅, 新溪園, 有燐荘などがある「美観地区」の伝統美観が保存の対象となった(新溪園は1922年, 孫三郎により倉敷町に寄付された)。大原美術館分館や總一郎が創設者である倉敷国際ホテル(開業: 1963年), 没後の1974年に倉敷紡績所の工場を改装して設立された, 宿泊・文化施設の倉敷アイビースクエア(1974年)は浦辺の設計である。1950年に大原(資)の持株を譲渡した対価の2,800万円を1,000万円は倉敷文化基金として, 1,800万円は困窮者救済および市立小学校・幼稚園などへの指定寄付として倉敷市に寄付, 相続したものを社会に還元し尽くした¹⁵⁾。1946年には水島港湾改修期成同盟会を結成し, 初代会長に就任した。これはビニロン原料の将来の供給源と見込んだ石油精製工場の誘致とも多分に関連するために純粋な慈善事業には分類し難いが, 水島臨海工業地帯の形成に重要な役割を果たしたことは確かである(詳しくは, 水之江・竹下(1971)を参照

-
- 12) 2022年にはかつてあった児島虎次郎記念館(1975-2017)が新児島館として再生される。新児島館では児島の作品の他に, 「〔彼〕が渡欧の帰路に立ち寄ったエジプトなどで収集した」(山陽新聞社編 1991, p. 115) 美術館も展示される。
- 13) 民芸と関連して, 戦時中, 万寿航空機製作所(旧倉敷紡績万寿工場)に入所した沖縄県勤労女子挺身隊の中に平良敏子(1921-)がいた。平良は戦後間も無く, 「沖縄文化再建のために」總一郎が開始した「織物の勉強会」に参加, その後, 国頭郡大宜味村に戻り, 「沖縄で一番古い織物の一つといわれている」(平良 1991, ②)「芭蕉布作りにたずさわ〔り〕」(id., ①), 2000年に重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。平良は總一郎に「物心両面から励ましをいただいた」(id.)と謝意を表している。
- 14) 總一郎は1936-38年に欧州・米国に滞在したが, その折にドイツ・ロマンティック街道沿いの中世都市, ローテンプルクを訪問し, 帰国後, 浦辺に「倉敷を日本のローテンプル〔ク〕にしようではないか。倉敷の町は決して引けは取らないヨ」(浦辺 1978)と語り掛けた。なお, ローテンプルクは「第2次世界大戦では街の約4割が焼失し〔た〕が, 市民によって大切に修復作業が行われ, 中世のままの街並みを今に伝えてい〔る〕」(NHK website, “世界ふれあい街歩き,” “ローテンプルク・オブ・デア・タウバー/ドイツ”。
- 15) クラレ(1980)『大原總一郎年譜』に倉敷市への寄付の約5か月前の5月11日に「旧大原合資会社の寄付により, 日本フェビアン研究所を設立」との記載があり, 2,800万円は大原(資)の持株を譲渡した対価の全額ではないかも知れない。日本フェビアン研究所には後で触れる。

のこと)。広域的な活動としては「流域全般の文化向上に寄与するための事業を行うことを目的」とした1954年の高梁川流域連盟の設立と初代名誉会長就任が挙げられる。現在、同連盟には倉敷市など7市3町が加入している。倉敷から離れると、ノーベル物理学賞受賞者である湯川秀樹の研究を後援するための、1956年の湯川記念財団の設立に参画して理事に就任、ノートルダム女子大学（現京都ノートルダム女子大学）の1961年の設立では設置準備委員会の委員兼建設募金副委員長を務めた。財界活動では倉敷商工会議所会頭（1946.10-12）、関西経済同友会代表幹事（1950.4-51.3, 1960.4-61.3）、関西経済連合会常任理事（1948.10-68.7）・副会長（1961.10-65.5, 1966.11-68.7）、経済団体連合会常任理事（1964.5-68.7）などを歴任、1947年の岡山経済同友会の設立では中心的な役割を果たした（website, “岡山経済同友会の歩み”）。倉敷中央病院理事長（1943.1-68.7）、大原美術館理事長（1964.8-68.7）も務めた（68.7は死去するまでその職にあったことを意味する）。

謙一郎は地元、倉敷で倉敷商工会議所会頭（2001-10年）、岡山経済同友会代表幹事（1992-96年）、大原美術館理事長（1991-2016年）などを歴任した。現在は有隣会評議員会会長、倉敷中央医療機構代表理事理事長、大原美術館名誉館長・評議員、（公財）倉敷民藝館理事長・館長、（公財）日本民芸館理事などを務める。また、姉の犬養麗子（1935-2020）、妹の正田泰子（1945-）と1983年に音楽プロモート会社のくらしきコンサートを設立、麗子が死去するまで「年に2回ほど」「倉敷の町に優れた演奏家たちを呼び」、「コンサートを開催し〔た〕」（くらしきコンサート website, “くらしきコンサートとは”）。2016年に長女のおかね（1967-）が謙一郎に代わって大原美術館理事長に就任、他に有隣会代表理事、倉敷中央医療機構評議員、倉敷民藝館評議員も務める。

3.3. 慈善の思想

孫三郎が石井に感化されて改心したことは既に述べた（1905年には岡山キリスト教会で洗礼を受けた）¹⁶⁾。1902年元旦の日記に「腐敗せる宗教と而して教育と政治」を改めることが「神より与えられたる余の仕事である」（『大原孫三郎伝』, p. 40）、岡山で英国人伝道師、Barclay Buxtonの説教を聞いた後の日記（日付は不明）には「余は全く神の御心に依って生れ、生きるものであるから、御心に依りて設立された孤児院に尽すべきは、これまた余の第二の天職であると信ずるものである」（*id.*, p. 49）と記される。また、1907年、当時、大原家の秘書であった柿原誠一郎に「大原家の財産というものは祖先から貰ったものだが、僕はこの財産は神から世のため、社会のためにお預かりしているものだと思っている」（*id.*, 72）と

16) 孫三郎はキリスト教（旧約聖書）の他に、二宮尊徳の高弟である富田高慶が著した尊徳の伝記、『報徳記』からも影響を受けたとされる。二宮は現在の神奈川県小田原市に生まれ、勤労、儉約（分度）と推譲を柱に荒地の開墾と農民の救済を実践した。その方法は「報徳仕法」と呼ばれる。

述べ、柿原の「社会のために大原家の財産を潰そうというのが、あなたの理想なのですか」との問いに「そのとおりです」と答えている (*id.*, p. 73)¹⁷⁾。実際、死後、国税庁が税務調査を実施したが、担当した役人は孫三郎が「資産の70%以上を社会事業に出している」ことを確認し、「大原さんという方は真に偉い方であると分かった」と感心している(木村長三郎談; *qtd. in* 阿部 2017, p. 198)。また、柿原の「私は元来社会主義者で・・・」との発言を受けて、「いや僕も実を言えば社会主義に関心を持っている」と答えている(『大原孫三郎伝』, p. 72)。そして、労働(労使)問題に関して、1917年に倉敷紡績の工場長会議での講演で「職工その人の人格を認めその幸福を増進するということは、実に私の労働問題解決に対する主張の根本主義であって、同時に倉紡の職工待遇上の根本主旨である。・・・、この主張と会社の利益とは必ず一致するものであることを信じて実行している[]」(*id.*, p. 129)と述べている。また、そうした取り組みの背景に紡績会社で働く女子工員の劣悪な労働・生活環境があり(細井(1925)を参照のこと)、講演を「この際わが社が率先してこの主張を完全に実現するに至ったならば、・・・実に天下の労働問題に対して先鞭をつけることとなる」(『大原孫三郎伝』, p. 130)との言葉で締め括った。ただし、直ぐ後に「温情的な考え方や恩恵的な施策」では社会問題を解決するのに限界があるとして、「社会科学によって真理を追求し、それを基として具体的な解決を図る」(*id.*, p. 156)研究所を設立することとなる。なお、3.2.で触れた岡山孤児院を1926年に解散したが、この理由の1つを「経営のための寄付金募集行為などによって、社会民衆に対する社会教育乃至社会事業への認識を与えるには役立ったが、子供の為には、人は同情してくれるものだという感じを持たせた。即ち独立心を減ぼし、自営の精神を奪ったのは最も悪かったと思う」(*id.*, p. 217)と述べる。続けて、「それ故に今後の対策としては、国家が孤児院の名を冠せない機関によって処置することが必要である」(*id.*)と提言する。

地元に関しては、倉敷を「[エルサレム]たらしむる」のを自身の「聖職」とした(『大原孫三郎伝』, p. 55-56)。ただし、總一郎によると、「[自分は倉敷という土地にあまり執着し過ぎた、倉敷という土地から早く離れて中央に出ていたら、もっと仕事ができていたはずだ・・・]」ということをよくいっていた(大原總 1981a, p. 71)。これは晩年に企業活動を引退して慈善活動に専念した Andrew Carnegie とは異なり、それらを両立させる中での孫三郎の葛藤が後悔の形で吐露されたものである。3.1でも触れたが、1933年に倉敷紡績と倉敷絹織の本社業務を大阪出張所に移管、自らは「倉敷の本邸と住吉別荘」を「生活と事業活動の本拠」(『大原孫三郎伝』, p. 273)とした¹⁸⁾。大原美術館は1919年、虎次郎が孫三郎の勧め

17) ただし、「[孫三郎]は總一郎の誕生後、「・・・、子供が生まれて少しその考えを変えねばならぬようになった」と[]述懐している」(『大原孫三郎伝』, p. 82)。

18) ただし、1938年に住吉別荘が豪雨被害に遭ったため、京阪神地方の住居をそこから1934年に買い受けていた京都北白川の山荘に移した。住吉別荘は後に總一郎夫妻の住居となった。

で再度、渡欧する際に「我が国ではまだ本格的な洋画に接する機会がほとんどないので、若い画徒のためにも、現代フランス絵画の代表的な作品数枚だけでも購入し、持ち帰りたい」（『大原孫三郎伝』, p. 171）との要望を孫三郎が承諾したことが嚆矢となる。

總一郎も資本主義に問題がないとはしない。1947年の（第3次）日本フェビアン協会¹⁹⁾の設立に参画、1950年には「日本を民主化するための、社会民主的政策を研究する」（大原總 1981a, p. 73）日本フェビアン研究所を設立した。1948年の協会の総会では「生産の増大が日本経済を復興せしむる鍵である事に異論はない。併し分配の問題はこれを第二義的だと考えることは行き過ぎである。分配の問題を改善する事は、社会正義の為にも、生産の力強い復興と前進の為にも、真剣に取り上げられなければならない」（クラレ編 1980, 資料編, p. 38）と述べ、またその分配に関して「職を与えられるも労働のみによっては生活に必要な糧を得られない人々」の救済のために関連機関に一定規模、一定内容以上の企業の株式を移転させ、またその株式を議決権のない優先株式とすることを提言した。「租税の形式を通せざる利潤の直接分配」の形式は「企業の倫理性に対する自覚の要求は遥かに多く満たされ、努力に一定の意義と希望とを見出す事ができる」（*id.*, pp. 39-40）とする。そもそもそうした人々の救済は、上の引用文には「社会正義」の言葉があるが、「国民は各々1人格としてその生存権を持つものでありそれは人格として尊重さるべき」（*id.*, p. 39）ことを理由とする。また、企業の倫理性と関連して、1960年に関西経済同友会代表幹事に就任すると、「日本経済の在り方と経営者の人間像に関する研究委員会」を設置して委員長に就任、1962年に京都経済同友会で経営者の社会的責任を経営者の人間像という形で講演した。そこでは、経営者の社会的責任には①企業を通じての経済的な責任、②企業を通じての社会的な責任、そして③社会のエリートとしての、もっと広い責任、があるとする。①は「株主のために利益を上げること」（大原總 1981b, p. 268）、②は「技術革新による利潤、社会的、国民経済的貢献に対する対価としての利潤」を上げること（*id.*, p. 272）、③は「その国の経済体制、社会体制を正当に守っていく責任」（*id.*, p. 283）と説明する。②・③は總一郎の他の論説（大原總 1961）のタイトルにある「経済成長によき内容」を与える、つまり国の政策を誘導し、あるいはそれを補完しながら経済活動を国民生活の向上に密接に関連付けるものとなる。なお、②に関して「国際収支が悪いというときに、輸入物質をむやみに使ってレジャー〔関連の事業〕をやるということは、国民経済的によくない」（*id.*, p. 279）との見解は、既に述べたことではあるが、ビニロンの事業化を断行した理念を逆説的に物語る。慈善活動は③に属するものであり、また倉敷でのその基礎には郷土愛がある。倉敷や倉敷での生活をテーマとした幾つかの随筆や孫三郎の「お前も、あまり地方のことに深入りすると、仕事の邪魔になる

19) フェビアン主義とは「マルクス主義に反対して漸進的に資本主義の欠陥を克服しつつ社会主義の実現をはかろうとする考え」（『ブリタニカ国際大百科事典』）のことである。

ぞ」との警告に対する「私もそうとは思いながら、やはり同じことになりそうである」（大原總 1981a, p. 71）との言葉の中にそれが透けて見える。街づくりでは当時、「東京の小さな形のもの、あるいは大阪の小型のものにすることが、地方の発展」と考えているような地方都市が多数、見受けられることを危惧し（大原總 1981b, p. 293）、それぞれの都市の性格に合わせた開発の方向付け、例えば「非常に高度の教育と文化の伝統をもつ」松江は「教育都市」としての開発、を主張した。それゆえ、總一郎が提唱した倉敷の街づくりはそこに残された歴史的景観を生かすものとなる。最後に、対中ビニロン・プラント輸出に関しては、経営者として上記①の責任を意識した上で、「繊維に不足を告げている中国人大衆にとって、いささかでも日々の生活の糧となり、戦争によって物心両面に荒廃と悲惨をもたらした過去の日本人のために、何程かの償いにでもなればということ以外にはない」（*id.*, p. 176）との心情を語っている。

謙一郎は2000年に米国アスペン（CO）で開催された Aspen Inst. の50th Anniversary Symposium, “Globalization and Culture”に参加したが、そこでの議論を踏まえ、「〔我々〕が直面する地球規模の問題を、人類全体にとって好ましい形で解決するためには民族同士、国同士が〔〕深いところでの相互理解を実現しなければならない」（大原謙 2002, p. 27）と述べ、また「深いところ」を「思想、哲学、文学、芸術、美学、宗教、歴史、等々文化全般の次元」と説明する。つまり、美術館に美術作品の鑑賞機会の提供を超えた役割を見出しているのである。また、日本の文化に関して「この国の自然と風土の中で育ててきたものの感じ方や考え方、美術や文学、思想や宗教など」を「今の、なにかぎすぎすと尖った世界のあり方に一石を投ずるもの」（*id.*, pp. 36-7）と評価する一方で、「〔そうしたもの〕を生活の中に残し、それを大切にしている」のは地方都市の住民であるとする（*id.*, p. 37）。そして、そうであるからこそ日本の地方都市は「世界に対してアイデンティティーを主張でき」、「世界から尊いものとされることができる」、そして「日本再生のカギを握る」と述べるのである²⁰⁾。

4. 林 原 一 族

4.1. 企業家として

林原家は「戦国時代に美濃に興った池田家に代々仕え」（林原健 2014, p. 104）、後に「士分を捨て、藩の御用商人とな〔り〕」（*id.*, p. 105）、明治維新後の1883年に克太郎（1857-????）

20) 謙一郎は「美術の分野で倉敷が世界と質の高い触れ合い方をしている」（大原謙 2002, p. 196）と述べ、また音楽の分野でも同様であることを幾つかの例により指摘する。しかし、そのことが日本再生の前提とされる地方再生に結び付くのか、正直、筆者には分からない。

が甘味料として使われていた水飴を製造する林原商店（1943年に㈱林原に改称）を設立した²¹⁾。同社の発展に大きく貢献したのは3代目の一郎（1908-61）で、彼は岡山県第一岡山中学校、大阪高商（現大阪市立大学）を卒業、1年間、京都帝国大学（現京都大学）で水飴の製造方法を研究してから家業に就き²²⁾、1932年に社長に就任した。しかし、早々に「原料のとうもろこしの関税が上がって仕入れ値が高騰」(id.) したことなどから一旦、家業を離れて満州国警務司に奉職したが、保次郎（1884-1934）の死去により家業に戻った。そして、1935年に原料の麦芽と燃料を大幅に節約する「酸麦二段糖化法と呼ばれる水〔飴〕製造の新技术を開発」(林原靖 2013, p. 44)、戦後の1950年には生産量日本一（日産約15万 kg；林原健 2014）の水飴製造業者となった。1946年にカバヤ食品、1953年に大日本乳業（現オハヨー乳業）を設立（ただし、両社は一郎の死後、早々にグループから離脱）、1947年には「GHQの指令により解体された」理化学研究所の尾形輝太郎研究室を引き継ぐ形で日本感光色素研究所を設立（林原 website, “錠剤ルミン[®]Aの歴史”）、ここで医薬品のルミンや「防腐効果のある化粧品配合剤が開発された」(林原健 2003, p. 111)。さらに、「ホテル〔〕新聞社、製紙、運輸、印刷、倉庫、観光、不動産」(林原靖 2013, p. 45) に事業を拡大した。

一郎が52歳で死去すると、当時、慶応義塾大学生であった長男の健（1942-2020）が社長となった（ただし、卒業まで社長職は一郎の弟の次郎が代行した）。「1963年に粗糖の輸入が自由化され」、「水飴、でんぶんメーカーの多くが〔〕姿を消してい〔く〕」(林原健 2014, p. 131)、また社長就任後に「社員の約半数が・・・辞めていく」(id., p. 160) 中で健は「新しい糖を作り出す」研究に邁進²³⁾、点滴用輸液となるマルトースと「低カロリー甘味料の主原料」となるマルチトール、「カプセル薬のカプセルに最適」なプルラン、「ガンや風邪に対抗できる有用な生理活性物質の1つである」インターフェロン、「夢の糖質」のトレハロースなどの製品またはその製造法の開発に成功した（林原健 2003, ch.3）。1970年には「研究体制を充実させるため」(id., p. 60) に研究部門を林原生物化学研究所として独立させ、1985年には同研究所内に「ガン研究をより深めるために」「世界最大級」(id., p. 108) の細胞センターを建物に約30億円を掛けて設置した。林原の売上高は約280億円、グループ全体のそれは約800億円（林原健 2014）に達したが、不適切な会計処理と債務超過を問題視したメイン

21) ただし、秋吉（1983）は「水飴製造は、御用商だった旧藩時代からやっていた」（p. 38）とする。

22) 京都帝国大学での身分は不明。なお、林原健（2014）は2代目の父、「保次郎が資金援助をしていた縁で、京都帝国大学〔〕の工学化学教室に入〔った〕」（p. 117）と述べる。

23) 健は「林原の経営が傾き、何をすべきか迷っていたときに」「ソニーのカラーテレビ工場を訪ね」、創業者である井深大の「日本独自の技術以外に、日本が生き残る道はない」との言葉を聞いて「技術に立脚したでんぶん化学メーカーへの転換を〔〕決断〔した〕」と述べる（林原健 2014, p. 172）。

バンクである中国銀行の主導で2011年に会社更生法の適用を申請²⁴⁾、林原は大阪・東京を本社とする化学系専門商社、長瀬産業の100%子会社となり、健と靖は林原の経営やすぐ後で触れる林原美術館の運営から離れた。ただし、林原は本社、研究・開発拠点と製造拠点を岡山に留める。健は2018年、前年に設立されたサプリメント卸業の(株)林原健307ミレナラボ (現(株)林原健307LAB；本社：東京都)の取締役就任、その後、CKO (chief knowledge officer) を務めた。また、2017年に設立された林原 LSI が発売するサプリメントをプロデュースした。

企業経営に関して付記して置くと、「新たな糖の基本となる大切な素材」(林原健 2018, p. 81) であるアミロースの製造で米 Corn Products Int'l (現 Ingredient) がトウモロコシの品種改良、林原が酵素——日本では酒、醤油や味噌の製造にも利用されて来た——によるアプローチを行ない、林原が勝利したが、健は「社長就任から10年ほど経った頃、「日本人の精神構造にふさわしい、自然と共存する考え方を技術にして輸出できる、そんな産業を興したい」[との文章を社内報に記し [た]] (id., p. 142)。また、多くの日本企業が欧米型に倣い、実力主義、成果主義を取り入れている」ことに対して、それらのメリットも認めながら、「日本の文化に馴染んだ、もっと日本人にあった企業のあり方、経営スタイルというものがあるはず」(id., pp. 151-52) と述べている。

4.2. 慈善家として

一郎は刀剣の蒐集家であり、美術館の設立を計画していた。そこで、1961年に「遺志をついだ遺族・知友」(林原美術館 website, “ようこそ林原美術館へ”) が「一郎 [] の個人的コレクションと [] 旧岡山藩主の池田家から引き継いだ大家の伝来品」、「刀剣・武具・甲冑・絵画・書跡・能面・能装束・彫漆・螺鈿・蒔絵・陶磁・金工等、約9千件を所蔵」(林原美術館 website, “収蔵品の概要”) する林原美術館を設立した(開館：1964年；当初は岡山美術館²⁵⁾)。所蔵品には国宝3点、国指定重要文化財26点が含まれる。

健は企業メセナとして1987年に空手道場の林原道場、1991年に林原哲多刀剣鍛錬道場、1992年に林原自然科学博物館、1994年に林原桑野刀剣鍛錬道場、1995年に研修施設の漆の館、1999年に林原類人猿研究センターを設立し、1985年には「地域文化、学術研究の振興 [を] 目的」に国際的な会議を開催する「[林原フォーラム] を立ち上げた」(林原健 2003,

24) スポンサー入札で長瀬産業が(株)林原を700億円で落札したが、他に850億円の一番札を入れた企業グループがあった(林原靖 2016)。また、(株)林原が所有していた土地や中国銀行の株式も安値で売却された。それでも、1,300億円の借入金の弁済率は93%に上った。なお、(株)林原が岡山駅に所有していた約5万 m²の土地はイオンモールに売却された。

25) 健によると「いずれは県に寄付して県が運営する予定になっていた」が、「やがて県 [が] 負担のある美術館の引き受けに及び腰になってきた」ため、「林原グループだけの運営とし、名称もいまの林原美術館に改めた」(林原健 2003, pp. 91-2)。

pp. 84-5)。林原自然科学博物館は「恐竜の化石を展示する」他に、「ゴビ砂漠での化石発掘調査を手掛けた」（林原健 2014, p. 181）。2002年には松下電器産業とパナソニックセンター（現パナソニックセンター東京）内にパナソニックデジタルネットワークミュージアム「林原自然科学博物館ダイノソアファクトリー」を開設した。その他、1983年に一郎が400万円で購入した岡山城の堀を岡山市に寄贈、さらに1962年に林原奨学寄付金により岡山大学医学部に林原賞（現岡山医学会がん研究奨励賞（林原賞・山田賞））、1986年に林原国際癌研究フェローシップ奨学金制度、1991年に国際芸術・文化振興奨学金制度、2001年には小児癌で失明したピアニストの梯剛之と「林原＝梯剛之小児ガン基金」を設けた。こうした活動の幾つかは一郎が1952年に設立した林原共済会により実施された。ただし、「メセナに投じた金額は多くても年数億円程度で会社に悪影響を及ぼす額ではない」（*id.*, pp. 180, 182）とされる。経営破綻後、林原美術館は「事業承継先を探して〔来たが〕、適切な承継先が見当たらないことや、地域文化の発展に寄与するという観点から、今後も引続き、林原から長期的な支援〔が得られる〕こととな〔った〕」との声明を発表した。他方で、類人猿研究センターは京都大学に、林原自然科学博物館は岡山理科大学に承継された。ダイノソアファクトリーはそれ以前の2006年に閉館している。

4.3. 慈善の思想

一郎が林原共済会を設立した、あるいは美術館の設立を計画した理由は不明である。ただし、池田家から美術品、岡山城の堀や本邸を高値で買い取るなど「池田家十人の忠臣の随一」と言われる援助を行なったのは「旧藩政時代、代々札差しとして受けた主恩に報い〔る〕」（秋吉 1983, p. 379）ためである。

健は積極的に企業メセナを展開したが、それを慈善事業ではなく、①「研究開発型企業にとって、最も大事なことは社員の独創性、独自性であり」、多くの研究者の様々なメセナへの参加と交流がそれを育む、②メセナが企業知名度を高め、「営業〔面で〕大きな力となる」との理由から「実際の企業活動に不可欠な活動」、さらには「〔企業の生命線〕だと位置づけてい〔た〕」（林原健 2003, pp. 87-90）。さらに、社員の福利厚生と地域に関連して、③「地域の福祉、文化、スポーツにかかわる機会」を与えることで「社員一人ひとりの人格を豊かにし、実りある人生の一助となり得ると思っている」（*id.*, p. 90）と述べる。地元に対する思いもあり、「林原がするメセナは地元岡山のためになるものか、文化振興になるもの」（林原健 2014, p. 183）に限定された。哲多町（現新見市）と岡山市内に刀剣鍛錬道場を設立したのは備前刀、漆の館を設立したのは備中漆の文化と技術を地元に残すためである。文化の重視は4.1で触れた企業経営の理念とも共通する。

5. 松田一族

5.1. 企業家として

松田与三郎（1872－1951）は岡山県の西大寺村（現在は岡山市）に生まれ、地元での「多くの会社の設立にかかわった」（赤井 2007, p. 134）が、そうした会社の中に西大寺軌道（株）（後の西大寺鉄道）が含まれた。1910年設立のこの軽便鉄道は開業当初、業績が低迷、取締役であった与三郎は他の出資者からの要求で「やむなく」株を買い取って「大株主」となり（*id.*, p. 135），1919年に社長に就任した。その後、バス事業に参入し、1935年に同社と岡山電気軌道（岡電）のバス部門同士を合併して岡山バスを設立した。また、1936年に下津井電鉄と山陽バスを設立、同社は翌年に両備バスに名称を変更、1952年に「下津井電鉄資本を分離」（*id.*, 137）し、1954年に岡山バス、1955年に西大寺鉄道を合併した。1960年には与三郎の長男で、両備バス会長であった壮三郎（1895－1991）が「経営が悪化しした」（松田 1993, p. 23）岡電の社長に就任、両社は「岡電〔〕は市内電車〔（路面電車）〕と市内バスを、両備バスは西大寺や玉野、倉敷への郊外線として〔〕棲み分けをしした」（両備グループ（両備 G）website, “代表メッセージ”, “エコ公共交通大国おかやま構想のキックオフ”）。両備 G は1960年代に西大寺鉄道を廃業（1962年）する一方で、「マイカー時代の到来を見据えて、事業の多角化を開始」（両備 G（新卒採用）website, “110年の歴史”）、またグループ企業の代表に大きな権限を与える「信託経営」（この言葉は5.3. で述べる、「企業の社会的な役割」の①の意味も持つ）を採用した。壮三郎の長男で、両備 G を継承した基（1921－98）が「〔そうした〕戦略の展開を人材供給面で容易ならしめた」（松田 1993, p. 109）とするのが幹部養成のための青年重役会である。これは基が1959年に「日本青年会議所チームの一員に加えられて渡米」した際に「持ち帰った」ものの1つで（*id.*, p. 108）、メンバーは「財務分析、労務管理、電算技術、マーケティング修得の4コースによる経営管理基礎講座」を修了した中堅幹部から選出される（*id.*, p. 110）²⁶⁾。基が米国から持ち帰ったものには「コンピューター導入」もあり、1965年に協電子計算センター（現両備システムズ）が設立された。近年は基の女婿で、後継の代表となった小嶋光信（1945－）の下で①岡山市のコンパクトシティ化と②公設民営の形での地方公共交通の再生、に乗り出している。①では「2002年に次世代型 LRT「MOMO〔〕」を開発、投入し、2004年には空洞化する中心市街地・・・に〔超高層マンション〕を建設しした」（両備 G website, “代表メッセージ”, “中山下一丁目1番地再開発事業を起工!”）。②では岡電が2005年に和歌山電鐵を設立して南海電気鉄道

26) 2014年には「女性管理職・経営職を10年以内に10%まで引き上げるため〔の〕早期養成対策」として女性幹部養成講座、翌年には特別女性版青年重役会も開設された。

から貴志川線を引き継いだ。また、再生ではないが、同年に両備バスが津エアポートラインを設立し、公設民営の形で中部国際空港と津を結ぶ運航事業を開始した。

なお、両備バスは2007年にグループ企業の両備運輸と合併して両備ホールディングス（両備HD）となっている。また、現在、両備Gは両備HDと岡電を中核会社とし、2020年3月期（通期）には1,637.4億円の連結売上高を記録、内部取引控除前の数値によると部門別ではトランスポート&トラベルが33.8%、ICTが17.6%、くらしづくりが36.0%、まちづくりが12.6%を占めた。

5.2. 慈善家として

両備Gは1972年に(財)両備^{てい}裡園記念財団（裡園は与三郎の号）を設立、同財団は「郷土岡山の発展の一助となるよう」（website, “財団の概要”）生物学研究助成事業・博物館（美術館）運営事業などを開始、1992年に博物館（美術館）運営事業を新たに設立した(財)両備文化振興財団に移管した。両財団は2012年に公益財団法人に移行した。両備文化振興財団が運営する美術館には1966年開館の夢二郷土美術館本館（他に夢二生家記念館・少年山荘もある）と1984年開館の范曾美術館がある²⁷⁾。夢二郷土美術館は当初、両備バス西大寺バスセンターにあったが1984年に後楽園の近くに移転、空いた場所に范曾美術館が開設された（バスセンターと新・夢二郷土美術館は共に浦辺の設計である）。夢二郷土美術館に収蔵される岡山県出身の画家、竹久夢二（1884-1934）の「約3,000点に及ぶ〔 〕作品のコレクションは・・・基によって蒐集され〔た〕」（夢二郷土美術館）。范曾美術館に収蔵される中国人画家、范曾（1938-）²⁸⁾の作品もやはり基が「〔范曾〕との深い親交のもと私財を投げ打って蒐集〔し〕た」（両備G website, “お知らせ”, “〔范曾美術館〕リニューアル特別公開記念展”）ものである²⁹⁾。2020年3月末時点での両備裡園記念財団の資産合計・正味財産は5.6億円、両備文化振興財団の資産合計は8.15億円、正味財産は8.09億円で、両財団の資産にはグループ会社の株式が、両備文化振興財団のそれには美術品（絵画・陶器2,599点）、3.8億円が含まれる（『財産目録』）。また、両備裡園記念財団の2019年度の助成は生物学研究奨励賞の700万円など総額で1,070万円であった（『2019年度事業報告書』）。2013年には「元気なまちづくりの一

27) 1992年には緑川洋一写真美術館を開館したが、こちらは2001年に閉館された。

28) 夢二郷土美術館は范曾を「豊かな歴史的素養に基づいた人物画と、格調高い書に加え、詩や文章にも通じた“三絶の人”と称えられてい〔る〕。また、後楽園の名称の由来となった「先憂後楽」の言葉を遺した北宋の名臣・范仲淹の直系の子孫でもあ〔る〕」と紹介する（website, “范曾美術館”）。

29) ただし、基自身は「莊三郎〔 〕が公益のため私財を投じて寄付〔し〕たもの」（松田 1993, p. 141）とする。また、范曾美術館は「2001年・・・に一時閉館したが」（両備G website, “お知らせ”, “〔范曾美術館〕リニューアル特別公開記念展”）、現在は「毎年2月第三土曜日の西大寺観音院会陽の行事にあわせて、3日間特別開館〔している〕」（夢二郷土美術館 website, “范曾美術館”）。

環として、それを支える地域の公共交通を救う一助となることを目的に」(設立趣意)(一財)地域公共交通総合研究所を設立したが、その財産や収支の状況は不明である。

松田一族は財界活動に熱心で、岡山経済同友会代表幹事を基(第8-13代:1959.4-1969.3)、堯(第26・27代:1990.4-1994.3)、小嶋光信(第29・30代:1996.4-2000.3)、久(第38・39代:2014.5-2018.5)が務めている。なお、基の在任中の1964年に岡山県南地区が1962年制定の新産業都市建設促進法に基づく新産業都市に指定され、1967年には倉敷・児島・玉島の旧3市が合併して新・倉敷市が誕生したが、基は1962年に「・・・経済発展に相応した自治体の体系的な行政改革を成し遂げ、・・・集積するに足りる快適な新しい近代都市の創造に全力を傾注したい」(松田 1993, p. 53)と述べている。

5.3. 慈善の思想

基の企業家・慈善家としての思想は『岡山青年会議所十年誌』(1960?)に収録された「経営とJC」(松田(1993)に再録)に端的に見られる³⁰⁾。基はその当時の「国際的には米ソの対立は愈々深刻であり、同様国内的にも資本主義と反資本主義の対立抗争は熾烈をきわめ、時に内戦、革命前夜の様相を呈し、良識の支配は今や死に絶えんとするかの如くである」(*id.*, p. 48)とした社会情勢の中で企業の社会的な役割を検討するのである(「昭和20年代の末期〔に〕闘争至上主義の総評私鉄組合との、1年半にわたる争議」(*id.*, p. 90)を経験したこともそれと関連しよう)。やや長くなるが、引用しよう。

- ①今や資本主義は変ぼうを余儀なくされ、企業の考え方にして、単純素朴な私有の領域を離れ、社会制度の一環として、経営は資本の提携者〔(株主)〕を含めた全社会から信託されたものと考えられつつある。
- ②言い換えるなら高度産業福祉国家の共通の社会理念、経済理念は企業の公共性、社会性を前提として成立する。
- ③かくの如くして初めて社会主義、共産主義理論の展開によらずして資本主義自由主義自由企業制度を存続せしめる事が可能となる。
- ④利潤の追求は経営良否のバロメーターであり企業存続のため必要であるが、経営の社会的責任即ち社会性、公共性を前提としてのみ最大利潤の追求は許される。
- ⑤〔省略〕
- ⑥然らば企業として以上の理念を実現する方法は内々にあっては〔労働(使)関係(labor relations)〕、社会に対しては〔公共関係(public relations)〕においてほかない。(以上, *id.*, pp. 48-9)

30) 基は1961年の関西経済同友会第19回大会でも同趣旨の意見発表(論題:「現代における経営者の役割」)をしている。これも松田(1993)に収録される。

労働関係に関して、基は上記の争議が終結した後、地方バス・私鉄業界が斜陽化する中でそれが両備バス・両備 G の発展の原動力になったとする。また、西大寺鉄道を廃業した際に経営学の常套に反して「一人も辞めさせず」、「社員一人ひとりの得意分野を考えて仕事を作っていた」（小嶋 2014）こと、石油危機の際に「会社経営も苦しい」が家計も逼迫しているだろうとして「特別激励金」を支給したこと（松田 1993, p. 79）、は労使の連帯感・信頼感の構築に貢献したかも知れない。公共関係に関しては、5.2. で取り上げた松田一族と両備 G による美術館の設立・運営はその 1 つであるが、基は後に企業はより広く「市民性、郷土性をもって文化の保存、創出に携わるべきだと思 [う]」（*id.*, p. 168）と述べている。両備 G のサルボ両備は運営する岡山ガーデン（旧両備ガーデン）内に約150年以上前に建てられた農家を我楽多堂として移設している。また、米国では Rotary Club, Lions Club など各種民間団体への加入が幹部に企業外訓練の機会を提供し、また企業の公共関係活動の一環になるとの企業の認識があることを指摘する。なお、基はさらに「日本の経営者は・・・個々の企業の利害を超越した高い座標に立って・・・広範な領域に於いて、清新且魅力ある指導性を発揮・・・[せ]ねばならぬ」（*id.*, p. 39）とするが、この考えは既に述べた大原總一郎のそれと共通するものである。

6. 福 武 一 族

6.1. 企業家として

福武哲彦（1916-86）は現在の岡山市の「教員の家」（池田 2017, p. 165）に生まれた。岡山県師範学校を卒業し、東京商科大学附属商業教員養成所への進学を目指したが断念、1935年に教師となった。「[第2次大戦]中は満蒙開拓青少年義勇軍を率いて渡満 [していた]」（赤井 2007, p. 216）。1950年に父の求馬と岡山市に富士出版社を設立し、「[学生]手帳や地図帳、学習練習帳をつくった」（池田 2017, p. 165）が4年で倒産、1955年に新たに福武書店を設立し、「学校を回って生徒手帳を売り込 [む]」他に、「高校生対象の通信添削「通信ゼミナール」を開講した」（*id.*, p. 166）。商業教員養成所の英語の受験勉強に通信添削を利用したが、「この体験が進研ゼミの発想につながった」（*qtd. in* 赤井 2007, p. 215）。

總一郎（彼の名前は大原總一郎から取られた）は1945年に哲彦の長男として誕生した。1969年に早稲田大学理工学部を卒業後、産業機械商社に就職、数年で退社して日本生産性本部の経営コンサルタント指導者養成講座を受講した。1973年に福武書店に入社、東京支社で「当時最大手の旺文社模試と比べれば、西日本だけの微々たる実績 [] しかなかった」（福武 2003, ③）進研模試と哲彦が撤退と再挑戦を繰り返していた通信教育の進研ゼミを「基幹事業へと成長」（ベネッセホールディングス（ベネッセ HD）website, “グループ沿革”）させ

た。1969年に高校講座から開始された通信教育は1972年に中学講座、1980年に小学講座、1988年に幼児講座（現こどもちゃれんじ）が開設された。1985年に副社長に就任すると岡山に戻り、哲彦の死去により社長に就任した。1990年に「生徒の減少」を踏まえて事業領域を「教育・語学・生活・福祉」と定め、「積極的な投資を断行」(id.)した。1993年に世界的に語学学校を展開する米 Berlitz Int'l, Inc. (現 Berlitz Corp.) の株式の67%を3億7,420万ドル（約460億円）で取得、2001年に完全子会社化した。1998年には通訳・翻訳事業者のサイマル・インターナショナルを買収、2005年にはパソコン教室を展開するアビバジャパン（現リンクアカデミー）を傘下に入れた（が、両社はそれぞれ2020年と2010年に売却した）。哲彦は「総合出版社への変身を目指し」（福武2003, ⑥）、一般書籍の刊行にも乗り出したが、1999年に同事業からも撤退した。他方で、1986年には衛生看護など「3学科からなる女子〔高校〕と看護師、歯科衛生士を育てる2つの専門学校」（福武2003, ⑬）を持つ岡山城北学園（ベル学園を経て現在は創志学園）の理事長職も引き継いだ。高齢化社会への移行を見越して「この学校を福祉の総合学校として改革」(id.)、またそのことの検討が「介護事業への参入の芽となった」(id.)。同事業は2003年に設立された(株)ベネッセスタイルケアに統合されており、同社は2020年4月時点で高齢者向けホームを全国330箇所、在宅介護事業拠点を40箇所運営する。通信教育では1989年に台湾、2006年に中国と韓国で幼児向け講座を開設、「中国〔 〕では、会員数が100万人を超えてい〔る〕」（ベネッセ HD website, “事業内容（セグメント）”）。さらに、2.3.2. で述べる瀬戸内海に浮かぶ直島（香川県）の開発に関連して完全子会社の(株)直島文化村が美術館とホテルが一体となったミュージアム（1992年）、他3棟の宿泊施設、レストラン、カフェ、スパ・ショップから成るベネッセハウスを運営する。1995年に社名をベネッセに変更したが、ベネッセ（Benesse）はラテン語の「Bene（良い、正しい）」と「esse（生きる）」を合わせた造語である。総一郎は2003年に社長を辞して会長、2009年に組織再編により誕生したベネッセ HD の会長となり、2014年に一線を退いて最高顧問、2016年に名誉顧問となった。総一郎には実子はないが、甥（妹、純子（1948-2017）の長男？）の英明（1977-）を養子とし、英明は2014年にベネッセ HD の社外取締役就任した。なお、ベネッセ HD・ベネッセコーポレーションは現在も本社を岡山市に留め、2020年3月期通期決算で約4,486億円の連結売上高を記録した。また、1975年に「〔そ〕の発送代行会社として誕生した」(株)グロップ（website, “ラインソーシング”）はやはり岡山市に本社を置き、2020年8月期通期決算で約424億円の連結売上高を記録した。1992年に福武書店のインハウスコールセンターを分社化する形で設立された(株)TMJ（現在はセコムの完全子会社）は東京に本社を置くが、岡山市に全国に7か所ある事業所の1つとセンターを設置している。

6.2. 慈善家として

総一郎は1985年、「[哲彦]の意思を継承するため岡山に根差した教育財団として(財)福武教育振興財団を設立」した(財団設立趣意書)。1996年にそこから(財)福武文化振興財団を分離、2007年に両財団を(財)福武教育文化振興財団(本部：岡山市)として統合し、2012年に公益財団法人とした。また、1985年に哲彦と直島町長であった三宅親連が約束を取り交わした直島南部の文化・教育を視点とした開発を引き継ぎ³¹⁾、当初はこれを福武書店・ベネッセとして実施したが、2000年代初頭の事業の見直しにより「アート事業的、あるいはまちづくり的な色彩の強いもの」(秋元 2018, p. 248)は2004年に設立した(財)直島福武美術館財団に移管された。同財団は1985年設立の(財)福武学術文化振興財団、2007年設立の(財)文化・芸術による福武地域振興財団とそれらが2012年に公益財団法人となった後に(公財)福武財団(本部：香川郡直島町)として統合した。福武財団は現在、直島で地中美術館(開館：2004年)、李禹煥^{リ ッ ュ ファン}美術館(2010年)、ANDO MUSEUM(2013年)など、瀬戸内の豊島、犬島、女木町と小豆島でも美術施設を運営する。地中美術館にはMonetが手掛けた最晩年の「睡蓮」シリーズ5点などが収蔵・展示される³²⁾。また、直島を会場の1つとして2010年から3年毎に瀬戸芸が開催されるが、同財団はそれを主催する瀬戸芸実行委員会(会長：香川県知事)の構成団体であり、総一郎は第1回から総合プロデューサーを務める³³⁾。これら財団の設立のための寄付の詳細は不明であるが、それらのwebsiteにある『決算報告書』によると2007-19年度の福武財団と文化・芸術による福武地域振興財団が受け取った、絵画、作品や株式を含む寄付の(評価)総額は332.5億円で、総一郎によるものが145.1億円(全体の43.6%)、妻・れい子、母・信子と純子の次男の松浦俊明(????-)によるものがそれぞれ49.0億円(14.6%)、31.0億円(9.33%)と56.5億円(17.0%)に上る³⁴⁾。「福武家の信託財産」と表記されるものも3.1億円(0.9%)だけある。福武教育文化振興財団は福武財団に39.2億円

31) 直島の歴史に極く簡単に触れると、財政が「火の車」だった直島は1917年に三菱合資会社中央製錬所(銅製錬所；現三菱マテリアル直島製錬所)を誘致した。しかし、心配された通りに煙害をもたらし、「島中がはげ山」となった。「戦後は施設改良が進み、排煙は・・・改善され」、また1950年以降、本格的な植林も実施されるが、山に緑が完全に戻った訳ではない(四国新聞 website, “豊島と直島”)。

32) 「睡蓮」と、「睡蓮一柳の反映」と「睡蓮の池」の一方はれい子、もう一方は総一郎が2009年度に現物寄付した(それ以前には同財団に寄託されていた)。また、同年度に「睡蓮一草の茂み」(資産価値：4,188,830,475円)が新たに収蔵されたが、年度早々に総一郎より絵画購入資金を目的とした3,565,665,000円の寄付がなされている(『平成21年度事業報告書・決算報告書』)。

33) 総一郎は新潟県越後妻有地域(十日町市・津南町)でも2000年に第1回が開始された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の総合プロデューサーを第4回から務める。また、英明がオフィシャルサポーターに名を連ねる(支援の内容は不明)。

34) 次女・美津子も45,214,042円(0.14%)を寄付している。2.3億円(0.70%)を寄付するシンガポールトラストについては情報がない(シンガポールにある Fukutake Family Trust のことか?)。なお、福武学術文化振興財団は当該期間に寄付を受け取っていない。

(11.79%)、その福武教育文化振興財団には2020年に信子がベネッセ HD 株式41.9万株（当日終値で約11.1億円）、福武家が13,195,200円だけ寄付している。基本財産は『決算報告書』などによると2020年3月末日時点で福武財団が406.2億円（簿価）、福武教育文化振興財団が55.1億円（同）であった。現在、總一郎は福武財団の理事長、福武教育文化振興財団の名誉顧問で、前者の副理事長に英明、後者の理事長に俊明が就任している。また、總一郎は1990年、福武書店が収集した、岡山市出身の画家、国吉康雄の作品を展示する国吉康雄美術館を本社ビル内に開館、2003年にこれを閉館すると作品・資料を一括購入（金額は不明）して岡山県立美術館に寄託した。

教育関連では2004年に東京大学情報学環に「ベネッセ先端教育技術学講座」を設置、2005年には「情報学環・福武ホール」の建設のために16.5億円を寄付した。2015-18年には福武教育文化振興財団と福武財団の3,925万円の寄付により岡山大学大学院教育学研究科に「国吉康雄を中心とした美術鑑賞教育研究講座」が開設された。同大学には總一郎の妹で、福武教育文化振興財団第3代理事長を務めた純子の10億円の寄付により設置された Junko Fukutake (J) Hall と Junko Fukutake (J) Terrace もある。

6.3. 慈善の思想

總一郎は東京では「『流行』ばかりに目が向いていた」が、直島と係わる中で「『不易』なるものについて考えるようになった」（福武 2003, ⑦）。また、「充実した生き方を追求する営みこそ不易の最たるもの」と捉え、企業家として「人にこだわる企業」作り (*id.*, ⑨)、つまり「社員1人1人が仕事の中に理想や目標をもち、自分から苦労に飛び込み、しかも喜んでそれをやり遂げる、そんな自立した人間の集まり」(*id.*) とすることに取り組んだ。1995年のベネッセと言う社名の採用、1994年の東京本部の都心の九段から郊外の多摩センターへの移転もこの一環である。また、直島のプロジェクト——『直島文化村構想』から2004年に『ベネッセアートサイト直島』に改称された——は「自然と芸術と建物の融合」を基本コンセプトとし、そこでは「よく生きるとはどういうことかをじっくり考えるための空間」（地中美術館開会式での總一郎の挨拶にある言葉；*qtd. in* 秋元 2018, p. 355）作りに取り組んだ。總一郎は「美術は、内省するためのもの」(*id.*)、またベネッセのプロジェクトの主担当となった秋元雄史（現東京藝術大学大学美術館長・教授）は「なにかに行き詰まっていた、常識的な見かたとは別の見かたをしたい、違う視点で考えたいというときには、アートのもつ〔〕超越的な視点は役に立つ可能性がある」(*id.*, p. 41) と述べる。直島の観光入込客数（様々な施設の訪問者の延べ人数）は右肩上がり、瀬戸芸開催年での増加は極めて顕著である（直島町観光協会「直島町観光入込客数」）。それゆえ、直島のプロジェクトには地域再生（街づくり）の事例として注目されており、總一郎も「それをアートで再生させたいという思いが

あ [った]」(福武 2016, p. 36) と述べるが、それがプロジェクトの唯一の目的ではなさそうである。上記の空間を人々に提供することはそこ(直島)に限定されない「地方の自立と健全な発展」と「国の発展」をもたらすものであり、総一郎はそうした社会を「United Regions of Japan」(福武 2003, ①)の言葉で見事に想起させる。東京大学の福武ホールにも直島開発と同様の役割が期待されている。東京大学は「日本の最高学府であり〔(「最高学府」は誤用ではあるが、そのまま引用する)〕、アジア、世界に向けて有効な研究を発信していく義務がある」とした上で、「直島のケースのように、この国が持つ本来の“らしさ”をしっかりと見極め、自然とともに生き、ものを大切にするという21世紀の新しい思想や概念を、ぜひとも東京大学から発信してほしい〔との〕思い」(東京大学基金 website, “寄付者インタビュー”, “第十回：福武総一郎様”)を寄付の理由としている。

純子は財団理事長就任時の挨拶書状に「自由で愉快的なコミュニケーションから新しいプロジェクトや夢が生まれ、それぞれの活動が有機的につながり、更に新しい活動へと展開していくことが大切だと思っています。岡山がそのような魅力的な未来を創造する地域であってほしいと願っています」と記したように、(公財)みんなでつくる財団おかやま初代表理事の石田篤史によると地元で財団などを運営する若者を応援し、彼らの交流機会を設けたりした(福武教育文化振興財団 2017)。J Hall は「合理的で寛容でボーダレスな出会いの場／自由で愉快的なコミュニケーションを誘発する場／セレンディピティを生み出す場」として設置された。なお、他の福武一族も積極的に寄付活動を展開しているが、それに関する思想は不明である。

7. 石川 康 晴

7.1. 企業家として

石川康晴は1970年生まれで、筆者がこれまで取り上げたどの企業家より相当に若い。1994年、地元の岡山市でレディスセレクトショップを開業、翌年に(有)クロスカンパニーを設立し、2002年に株式会社に改組、2016年にストライプインターナショナル(以下、ストライプ)に改称した。1999年に earth music & ecology ブランドを立ち上げて同社を SPA(製造小売業)に、同時にモードからベーシック、高価格からリーズナブルに、さらにファーストリテイリングの柳井正に「商売は規模だ」と指南されて小型店から大型店舗に路線転換(石川 2016)、2019年度の連結売上高は1,325億円に達した。しかし、石川は2020年にセクハラ疑惑に関する報道を受けて社長兼 CEO を辞任した。

7.2. 慈善家として

2014年に「主に芸術文化の振興によって豊かな地域文化の形成と人材の育成に資することを目的とする」(公財)石川文化振興財団を設立(2020年1月末時点の正味財産は約29.0億円に上る)、こちらは現在も理事長職にある。同財団は2016年から「岡山市で3年ごとに開催される国際現代美術展」である岡山芸術交流を岡山市、岡山県とその実行委員会の構成団体の形で共催し、石川は瀬戸芸での福武総一郎と同様に総合プロデューサーを務める。財団は第2回のために2018・19年度に合計で1億2,500万円の負担金を拠出(『岡山芸術交流2019開催報告書』)、また同回では311,731人の延べ来場者数(内、有料施設来場者数は85,127人)が記録された(*id.*)。石川は『G1経営者会議2016』では岡山でのコンセプチュアル・アート・ミュージアムの開設や岡山市街地から直島へのフェリーの運航に言及している。さらに、石川は企業経営の傍ら、2013年に岡山大学経済学部を卒業しているが(2018年には京都大学経営管理大学院(専門職大学院)を修了した)、2017年に石川、ストライプと石川文化振興財団が岡山大学と「文化的教育的プログラムに関する包括協定」を締結し、2018年12月に起業家精神養成のSiEED(STRIPE intra & Entrepreneurship Empowerment and Development)プログラムが開始された(ただし、「2020年3月末日を以て寄附講座という形を終了した」)³⁵⁾。2010年には「岡山の地域活性化と若手経営者の育成を目的に」(website, “Project”)「オカヤマアワード」を創設し、実行委員会会長に就任したが、これも2019年の第10回をもって終了した。他に、災害支援にも積極的に取り組んでおり、2018年の西日本豪雨では岡山県に1億円を寄付、これを基に「岡山県子ども災害見舞基金が創設され[た]」(石川 2019, p. 215)。

7.3. 慈善の思想

まずは岡山芸術交流に関連して、石川は芸術(アート)に①戦略的思考やクリエイティブ力を強化する、あるいはビジネス上での大局観を養う、②「VIPと呼ばれるような人たちや大企業のCEO」などの「共通言語」として「ビジネスを推し進める上での潤滑油、そして突破口にな[る]」(石川 2019, pp. 72-3)、などの効用を見出す。そして、そうした「アートがぐっと身近なものに感じられる世の中に[す]る」ことを「岡山芸術交流を始めようと思った理由」に挙げ(*id.*, p. 92)、「[それ]を通して岡山にクリエイティブなものを評価する風土[を]醸成[して]新しいビジネスの種を生み出したい」(*id.*, p. 110)と意気込む。ただし、石川の関心は岡山の振興に限定されるものではなく、広く20代、30代のビジネスパーソンに

35) SiEEDは新たに「“持続可能な開発目標SDGsを実現できる人材育成”にフォーカスしたアントレプレナーシップ教育プログラム」の-Ceedに改組された(-Ceed website, “SiEEDプログラムから-Ceedへの名称変更と再始動のお知らせ”。

岡山に来てそれを経験し、「会社の未来、日本の未来、世界の未来を考えてもらいたい」(*id.*, p. 195)とも述べる。次に教育に関して、石川はそれを「一番大切なこと」(*id.*, p. 196)と考える。岡山大学で実施された SiEED プログラムはこの考えに沿ったものであるが、岡山芸術交流も「子どもたちに、アートに触れる機会を提供し」(*id.*, p. 192)、「文化や芸術に対するリテラシー」(*id.*, p. 193)を習得させることをもう1つの目的(実施の理由)とする。西日本豪雨災害での寄付に当ってはそれが「子どもたちがいる家に優先して行き渡るよう」(*id.*, p. 215)要請したが、それには子どもたちの教育が念頭にあった。

8. 安原一族と岡崎一族

8.1. 安原一族

安原真二郎(1911-80)は広島県御調郡(現尾道市御調町)に生まれ、1948年に岡山市に大紀産業、1950年に富士倉庫、1965年に岡山学園を設立した。大紀産業は岡山県が葉タバコの一大生産地であったことからその乾燥機の製造を開始、現在は食品乾燥機を主力製品としている。富士倉庫は「[] 大紀産業 [] の倉庫部門として創業」、現在の取扱商品は「教育教材 [] 関連の印刷物や紙、・・・ワーキングウェアやその原料など」「岡山の産業そのものを表してい [る]」(RSK 山陽放送 website, “キラリと光るせとうちの企業”, “富士倉庫株式会社”)。岡山学園は予備校の岡山進研学院を運営する学校法人で、岡山進研学院は「ベネッセによる全面バックアップ」(website)をセールスポイント(特徴)としている。なお、大紀産業の社長職と岡山学園の理事長職は孫の宗一郎(1972-), 富士倉庫の社長職は博(孫?)に継承されている。

さて、岡山には岡山市立オリエント美術館(以下、オリエント美術館)があるが、同美術館設立の契機は1967年の、「イラク国立博物館から古代メソポタミア文明の重要資料が出品された」『美術の誕生 メソポタミア展』(岡山市 website, “岡山県立オリエント美術館”, “オリエント美術館とは”)の県内開催にある。安原はこの展覧会で「メソポタミアの美術にはじめて触れ、「目の覚めるような感銘」を受け」、「その年の秋に〔東京大学名誉教授の〕江上波夫 [] が引率する「オリエントの旅」に参加し」、「江上 [] の薦める土器数十点を [] 買い求め [た]」(*id.*)。さらに、「その後 [も] 3回、西アジアを旅行し、オリエントの考古美術品を猛烈な勢いで収集し [た]」(*id.*)。1973年、岡山市が展示施設を用意する見通しとなったため、「総点数1,947点、時価20億円とも30億円以上ともいわれる」(『山陽新聞』1977.11.1., p. 11)コレクションを岡山市に寄贈、1979年に総事業費14億円のオリエント美術館が竣工・開館した。また、その直前には「美術館の将来の拡充を願 [って], [] 3,000万円を寄付 [した]」(植田 1995, p. 96)。安原は「〔御調〕町の小・中学校に図書購入費を

贈 [ったり]」, 同郷の彫刻家, 圓鐔勝三作品を町役場に町役場や小・中・高等学校に寄贈したりもした (*id.*, pp. 22-23)。

8.2. 岡崎一族

江戸時代の嘉永年間に「綿布の卸問屋として岡崎商店 [が] 起業」され, 1901年にその「不動産の管理運営部門 [が] 分離独立」する形で岡崎合資会社 (現岡崎共同株) が設立された。同社は後に燃料の製造販売に進出し, 1929年に福岡県田川郡に石炭鉱業所を開設した (以上, 岡崎共同 website, “会社概要”)³⁶⁾。岡崎商店の創業家との関係は明確ではないが, 岡崎林平 (1902-80) は慶応義塾大学を卒業した「[1927] 年 [に] 中国製紙取締役に就任³⁷⁾, … [1934] 年から岡崎共同取締役を兼務」(『20世紀日本人名事典』), 1933-55年に真岡鉱業所所長, さらに1951-55年に田川郡糸田町町長, 1956-60年に福岡県教育長を務めた。1960年に岡山に戻ると, 1980年まで岡山瓦斯 (現岡山ガス), 1970-80年に岡山放送の社長, 1965-73? 年に岡山県教育委員, さらに1968-80? 年に山陽学園理事長を務めた。岡山瓦斯 (ガス) の社長職は次男の彬 (19??-), そして彬の長男の達也 (19??-) に継承された。彬は岡崎共同社長 (1979年-), 岡山商工会議所会頭 (1998-2019年) なども歴任, 現在は岡山ガスの会長の他に両備 HD の取締役と両備文化振興財団の評議員を務める。

オリент美術館の発展には岡崎家の果たした役割も大きい。林平は「日本に持ち込まれた古代エジプトやギリシャの品を買い集めた熱心な収集家」(岡山放送 2020) であり, 2005年に岡崎家の蔵から600点以上の美術品が発見され, 長男の重樹によりオリент美術館に寄贈された。2020年にも「蔵から新たに見つかった美術品22点と染織品など」(*id.*) が岡崎家から寄贈された。また, 2004年に開館25周年記念事業の一環としてアッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像」を総額 1 億2,600万円で購入した際には彬が購入準備基金募金委員会会長を務め, 「約4,400万円 [の] 岡山市民の寄付」(『朝日新聞』 デジタル, 2020.9.23) を集めた。

9. おわりに

大原一族, 林原一族や福武一族が設立した企業は, 本社を他都市に移転した, または他都市の企業の子会社となったものもあるが, 多くは現在でも岡山・倉敷に拠点を置き, 地域経

36) 石炭鉱業所が開設されたのは石炭の高温乾留により得られる石炭ガスが都市ガスの主原料として用いられていたことを理由とするかも知れない。

37) 中国製紙については, 何の情報も得られていない。ただし, 岡崎合同, 岡崎達也と岡崎直也 (達也の弟?) は2019年5月末時点で岡山製紙の株主であったことから (岡崎合同はその後, 持株を売却している), 同社と何らかの関係があるかも知れない。

済を支える。それら企業・機関と地域の企業の間には倉敷紡績が染色・織布・整理加工（・縫製）業者とデニム（ジーンズ）の生産ネットワーク（広島県福山市に及ぶ）を形成し、福武書店・ベネッセが業務請負、倉庫（物流）などの事業を社外に創出し、倉敷中央病院が岡山大学病院などと医療機器関連企業の発展を促すなどの協力・相互依存関係も存在する。さらに、彼らは経済団体の活動などを通じて密接な関係を築いており、ある一族の者が他の一族が設立した企業の社外取締役を務める事例もある。他方で、彼らは岡山県・瀬戸内地方で芸術・文化振興、またはそれを手段とした地域振興を大々的に展開して来た。中でも大原一族は孫三郎から4代に亘りそうした活動——ただし、孫三郎と總一郎の慈善活動は到底、その枠に収まらない——を継続する。また、彼らには慈善事業での交流や相互理解もある。例えば、2014年の就実学園創立110周年記念イベントで大原謙一郎と福武總一郎がそれぞれ「美術館は地域と共に生きて働く」、「現代美術による過疎地の再生－直島メソッドとは」のテーマで講演し、「瀬戸内文化圏の創造育成と情報発信」をテーマとした座談会のパネリストを務めた³⁸⁾。林原健は自著で地域の過疎化を防ぐために独自産業の育成の重要性を指摘した後に、「〔その〕ために、私の尊敬する先輩方は奮闘している」とし、大原謙一郎が「倉敷の文化、経済を引っ張りながら」、地元の倉敷芸術科学大学で「美術館や博物館〔の〕運営に大切な」非営利事業経営論を担当（1999.4－2017.3）していることを例に挙げる（林原健 2003, p. 195）。それら一族が設立した財団の間にも僅かながら協力関係が確認される。大原美術館はオリент美術館の「特別展 児島虎次郎は見た！－オリент文化 東西の架け橋－」（開催期間：2014.11.28－15.1.25）を「特別協力」、福武教育文化振興財団は同じく「企画展 街のにぎわい～オリент美術が紹介された頃～」（2015.11.17－12.27）を「助成」している。大原美術館と直島を実体験し、「ラッキーな環境にいた」（『G1経営者会議2016』）と述べる石川康晴は設立した企業を軌道に乗せて岡山芸術交流を開催し、さらにそれと瀬戸芸との連携に乗り出している。岡山芸術交流では岡山市立オリент美術館と林原美術館が展示会場に含まれる。起業家一族の企業活動と慈善活動が縦と横で繋がるのが確認されるのである。他方で、他の、とりわけ米国の都市・地域では頻繁に見られる大学への大口支援は福武一族によるものを除いて確認されない（小嶋光信は2005年6月14日から2008年3月末まで岡山大学の理事（経営管理担当）、その後、2011年3月末まで学長補佐・相談役を務めた）。支援

38) 他にも多くの例がある。2019年に岡山大学のJ Hallで開催された「瀬戸内を語るシンポジウム2019」（主催：岡山放送）では第一部で福武總一郎が「幸せをつくる直島メソッド～幸せなコミュニティとは」の論題で基調講演し、第二部のパネルディスカッション「新時代のコミュニティづくり～瀬戸内の未来を創る～」で總一郎と石川がパネリストを務めた（岡山芸術交流 website, “イベント”）。同年に岡山駅前の「ももたろう・スタートアップカフェ」で「トークイベント：石川康晴氏×福武英明氏 瀬戸内、岡山を盛り上げる。アートと起業の可能性！」が開催された。『G1経営者会議2016』第6部分科会D「企業と文化～企業が果たすべき文化への貢献～」には石川と共に大原あかねが登壇した（グロービス website, “G1経営者会議”（2016））。

対象を専ら芸術・文化とするのは岡山県の起業家一族による慈善活動の特徴と言えよう。また、本稿で取り上げた企業家の慈善の思想または慈善活動の目的は時代背景により異なり、近年ではそれが経済体制と関係することはなく、地域振興、そして同時に国全体の再生、さらには国際的な相互理解に置かれている。

【参 考 文 献】

- 赤井克己（2007）『瀬戸内の経済人——人と企業の歴史に学ぶ24話』吉備人出版。
- 秋元雄史（2018）『直島誕生 過疎化する島で目撃した「現代アートの挑戦」全記録』ディスカバー・トゥエンティワン。
- 秋吉茂（1983）『春雷のごとく 林原一郎風雲録』謙光社。
- 阿部武司（編）（2017）『大原孫三郎 地域創生を果たした社会事業家の魁』PHP 研究所。
- 池田武彦（2017）「記者歴50年——思い出す人たち その出会いと別れ（1）」『岡山人じゃが2017』吉備出版社。
- 石川康晴（2016）「ストライプのイノベーションと地域貢献」（第18回企業家賞記念講演）『企業家倶楽部』10月号。
- 犬飼亀三郎（1973）『大原孫三郎父子と原澄治』倉敷新聞社。
- 植田心社（1995）『オリент美術館を語る——その創設から今日まで——』日本文教出版。
- 浦辺鎮太郎（1978）「大原聰一郎と倉敷」環境文化研究所企画編集『歴史の町並みのすべて』若樹書房（松隈洋・笠原一人・西村清是（編）（2019）『建築家 浦辺鎮太郎の仕事：倉敷から世界へ、工芸からまちづくりへ』学芸出版社に再録）。
- 大原謙一郎（2002）『倉敷からはこう見える 世界と文化と地方について』山陽新聞社。
- 大原總一郎（1961）「経済成長によき内容を」『日本経済新聞』（大原（1981b）に収録）。
- 大原總一郎（1981a）『大原總一郎随想全集1 思い出』福武書店。
- 大原總一郎（1981b）『大原總一郎随想全集4 社会・思想』福武書店。
- 大原孫三郎伝刊行会（編）（1983）『大原孫三郎伝』非売品。
- 岡山放送（2020）「埋もれかけていた古代文化再び…岡崎コレクション！オリент美術館に寄贈」（<https://www.ohk.co.jp/data/2715/pages/>）。
- 倉敷商工会議所（2019）「新会館建設へGO!!」『倉敷』No. 756。
- クラレ編（1980）『大原總一郎年譜』クラレ。
- 小嶋光信（2014）「＜講演録＞ネコを駅長にした立役者～社会に貢献し、人を幸せにする経営理念「忠恕」～」『Bplatz』（<https://bplatz.sansokan.jp/archives/4771>）。
- 山陽新聞社（編）（1991）『夢かける 大原美術館の軌跡』山陽新聞社。
- 平良敏子（1991）「私の履歴書（①～⑩）」『日本経済新聞』。
- 中野茂夫（2001）「工業系企業の産業基盤整備が近代地方都市の空間変容に及ぼした影響～倉敷紡績と都市・倉敷の関係を事例に～」『日本建築学会計画系論文集』No. 544, pp. 273-80。
- 林原健（2003）『独創を貫く経営——私の履歴書——』日本経済新聞社。
- 林原健（2014）『林原家 同族経営への警鐘』日経BP社。
- 林原健（2018）『日本企業はなぜ世界で通用しなくなったのか』KKベストセラーズ（ベスト新書）。
- 林原靖（2013）『破綻——バイオ企業・林原の真実』ワック。
- 林原靖（2016）『背信 銀行・弁護士の黒い画策』ワック。
- 福武聰一郎（2003）「よく生きる（仕事人秘録）（①～⑩）」『日経産業新聞』。
- 福武聰一郎（2016）「ベネッセアートサイト直島から瀬戸内国際芸術祭へ」福武聰一郎・北川フロム『直島から瀬戸内国際芸術祭へ——美術が地域を変えた』現代企画室。
- 福武教育文化振興財団（2017）『不易』63。
- 藤田慎一郎（undated）「大原總一郎さんと美術館」『月報（大原總一郎随想全集 4社会・思想）』（福武書店）。
- 細井和喜蔵（1925）『女工哀史』改造社（岩波書店；岩波文庫、2009年刊改版）。

地域振興の原動力としての企業家の活動

二村一夫（1988）「大原孫三郎が出した金」『大原社会問題研究所雑誌』No. 359.

松田基（1993）（榎原雄一編）『リーディングカンパニーに育てる——信託経営の理念と実践——』日本文教出版.

水之江季彦・竹下昌三（1971）『水島工業地帯の生成と発展』風間書房.

武藤山治（1934）『私の身の上話』単式印刷.

日本繊維新聞社（2006）『ヒストリー 日本のジーンズ』日本繊維新聞社.